アジア系民族・モンゴロイドがアンデス文明・インカ帝国を創った

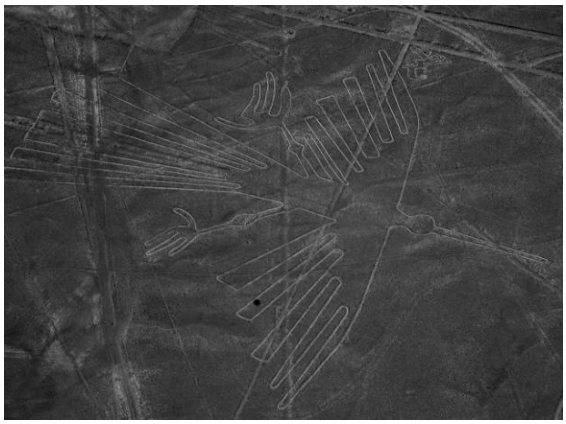
中村 豊 （会員番号 8）

アンデス文明の創造

現在から 1 万 4000 年前の氷河期は、現在よりも海水面が 100m以上も下がっていたため、現在のベーリング海峡は陸続き（ベーリンジア）であった。このベーリンジアからモンゴロイド系のホモ＝サピエンスが北アメリカ大陸に入り、ほぼ 1000 年間に南アメリカ大陸南端のフエゴ島まで拡散し、各地の自然環境に適応して生活するようになった。BC7500 年ごろ南アメリカ大陸にアンデス文明が起こったと考えられている。地域の文化は BC1000 年頃のペルー北部におこったチャビン文化が初めて広範囲、普遍的な広がりを持つ文化として登場した。紀元前後から北部のモチカ文化、海岸部のナスカ文化が現れ、同じころアンデス中央部におこったティアワナコ文化が広範囲に広がった。世界の四大文明がすべて大河沿いに発展してきたのに対して、アンデスでは、海岸の河川沿い、山間盆地、高原地帯のまったく異なる生態学的環境で、互いに交流を持ちながら、それぞれが独自の文化を開花させ、総体としてアンデス文明を発展させた。

ナスカ文化

ナスカの地上絵を残したと考えられるナスカ文化は、ペルー南海岸のナスカ川とイカ川の二つの河川流域の平原を中心に BC100 年～AD700 年頃に繁栄した、人口５万人程度の比較的小規模な社会で、アンデス文明の連続的に継承発展した文化と考えられている。1939 年、アメリカ考古学者ポール・コソックにより偶然発見されたナスカ地上絵には大きく三種類がある。ひとつは、コンドル、サル、シャチ、クモ、トカゲ、ハチドリ、人間、樹など動植物の具象図で、現在 70 点以上が報告されている。これらの絵は数 10～数 100m の長さの規模で、動物の図柄は多彩色土器に描かれた図像と共通している。二つめは、現在 200 点以上が確認されている台形、三角、ジグザグ文様などの幾何学図形、三つめは、約 60 の中心点から放射状に広がる直線で、現在 762 本が確認されている。これらの規模は数 100m～数kmに及ぶ。



ナスカ地上絵（ コンドル ）

地上絵は現在も新たな発見がある。岩石砂漠の太陽光線で焼けた黒い小石を片足で退け、15 ㎝幅ほどの白い土を出し、描かれている。実験により、指示する人と描く人で 100m 程度の地上絵は 1 時間ぐらいで出来上がることが判明している。地上絵は何の目的で描かれたのか？これまでの研究で農暦説、星座関連説、宗教説など、また UFO 発着場説など諸説唱えられてきたが、いずれも仮説と推測の域を出ていない。最近の山形大学の調査ではナスカの地上絵は水に関するものが多く、新たに発見した地上絵「生贄の首を持つ人」を含め、“雨乞い”のためではないかとの研究が進んでいる。ナスカの地上絵が 2000 年間も残っているのは、この地域の気候変動が無い証明だ。ナスカ文化は乾燥化による水不足のため消滅したのかもしれない。

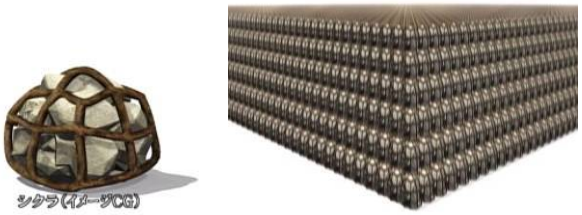
インカ帝国の興亡

インカ帝国は 13 世紀ごろに興り、スペインに滅ぼされる 1527 年まで続いた。ケチュア族が起こした多言語、多文化、多民族によって成立したアンデス文明最後の先住民国家である。「インカ」とはケチュア語で王（皇帝）を意味する。その特徴は、文字を持たない、金・銀を鋳造するが、鉄を製造しない、車輪の原理を知らない、塊茎類を主な食料基盤とし、家畜飼育が行われていたなどにある。首都クスコを中心として「四つの邦（タワティン・スウユ）」で成り立つ連邦制であった。最盛期のインカ帝国は、ペルー、ボリビア、エクアドルの大部分、チリの広大な部分を含み、アルゼンチン、コロンビアの一角にまで及んでいた。インカ帝国の首都で文化の中心のクスコはケチュア語で「へそ」を意味し、標高は 3399m で現在もペルーで有数の都市である。

クスコ　アルマス広場　大聖堂

インカの精巧な石組　12 角の石

その中心、アルマス広場はインカ時代には聖なるビラコチャ神殿があった場所で、スペイン人によって大聖堂へと建て直された。大聖堂裏の石壁にはインカ文化を象徴する精巧な石組の 12 角の石（Piedra de doce anglos）がある。12 個の角をもった大きな石は周囲の石と精巧に組み合わされ、インカ特有の石組みは、「カミソリの刃も通さない」と言われ、この 12 角の石の周囲にはまったく隙間がない。インカ帝国の高度建築技術の証拠となっている。サントドミンゴ教会はインカ帝国時代に「太陽の神殿」があった上に建てられた教会だが、「太陽の神殿」は政治と宗教の中心であり、インカ人にとっての心の拠り所だった。金を豊富に使い、かつては黄金に光り輝いていた。スペイン人に侵略された際に金を全部持ち去られ、建物は破壊された。現在は基礎の石組みだけにインカの技術が残されている。ペルーは環太平洋の地震国であり、何回も大地震に襲われ、その都度、スペイン人が建てた大聖堂や教会は崩壊したが、インカの石組は崩壊を免れ、強固な耐震性を誇っている。その建築物の基礎には「シクラ」と呼ばれる「植物繊維の籠で包まれた礫（れき、つぶて）」を積層して基壇を構築し、その上に精巧な石組みの神殿が建てられていた。



シクラを使用した建築物の基壇

マチュピチュ遺跡

マチュピチュ遺跡は 15 世紀のインカ帝国の遺跡で、ウルバンバ谷に沿った山の尾根（標高 2,430m）にある。遺跡の面積は約 13km^2 で、石の建物の総数は約 200 戸が数えられる。遺跡には大きな宮殿や寺院があり、その周囲に遺跡の生活を支える従者の住居がある。最大でも約 750 名の住民が暮らしたと推定される。アメリカの探検家ハイラム・ビンガムが 1911 年 7 月 24 日にこの地域の古いインカ時代の道路を探検していた時、山の上に遺跡を発見した。急斜面に位置したマチュピチュの頂上には、太陽の神殿があり、頂上には太陽をつなぎ止める石・インティワタナ（Intihuatana）が設置されている。夏至と冬至が正確に分かる窓があり、太陽を使った暦を観測、作成したとも言われている。現在、マチュピチュは宗教都市として捉えられている。遺跡には全体に行き渡るように水路が施され、日当たりの良い南東部が農地、北西部が市街地区となっている。畑には他の地域から肥沃な土砂が、海岸部からは海鳥の糞で作られた肥料が大量に運びこまれ、ジャガイモ、トウモロコシやコカなどが栽培された。インカの人々は車輪や歯車を知らず、牛馬のような大型家畜も持たなかったため、大量の土砂や肥料はラクダ科の小型家畜リャマに背負わせて運んでいたと考えられている。これらの遺跡を造った石切り場は尾根上にあったが、石は豊富にあるものの鉄と車輪の文化を持たないインカ人がこの遺跡を造るには大変な労力と高度な建築技術が必要であったことが窺えた。

マチュピチュ遺跡の麓のマチュピチュ村は福島県出身の移民・野内与吉氏が大変な苦労をして、水道や電気などのインフラを整備して村の礎を築いた。また、村長として鉄道やホテルを建設し、観光地として村を発展させた。その子や孫がマチュピチュ遺跡を世界遺産の登録に尽力し、現在の村の繁栄をもたらしている。

マチュピチュ遺跡とウルバンバ谷

アンデス文明の終焉

インカ帝国の滅亡は 1532 年、フランシスコ・ピサロに率いられたわずかのスペインの兵隊と鉄砲で始められる。その後、内戦が勃発したり、キリスト教改宗に抵抗が試みられたが、最終的に皇帝が処刑され、完全に征服された。ここに 1 万年以上続いたモンゴロイドのみにより発達してきたアンデス文明は終焉を迎えた。

しかし、実際はスペイン人が持ち込んだ伝染病がインカ文化に壊滅的な打撃を与えたようだ。1546 年に始まるチフス、インフルエンザ、天然痘、ジフテリア、麻疹などが広大な国土に張り巡らされたインカ道を通じ、蔓延し、免疫力を持たないインカ人は病死し、インカ帝国は消滅したと考えられている。

ブラジル平原は広大なジャングルの緑の絨毯で、この平原の水を集めて、流れ落ちるイグアス（大いなる水）の滝の迫力は凄まじいものであった。

イグアスの滝